HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	”Theudisk” と ”theodiscus”：最初期の史料事例を中心に
Author(s)	三佐川, 亮宏
Citation	北海道大學文學部紀要, 40(2), 133-147
Issue Date	1992-02-05
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33587
Type	departmental bulletin paper
File Information	40(2)_PL133-147.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北大文学部紀要 40-2 (1991)

“Theudisk” と “theodiscus”

——最初期の史料事例を中心に——

三佐川亮宏

はじめに

現代ドイツ語の deutsch という単語は，「ドイツの」，「ドイツ語の」あるいは「ドイツ人の」を意味する形容詞である。この単語は，いつ頃から文献史料で確認されるのであろうか。今日知られている限り，deutsch に関する最初の史料事例が現れるのは 786 年である。すなわち，これ以降ラテン語の文献において，theodiscus という中世ラテン語の形容詞が出現し始めるのである。これに対し，純粋のドイツ語形はその 200 年余り後になってようやく確認される。1000 年頃に Notker von St. Gallen が用いた diutisk という形容詞がそれである。古高ドイツ語の diutisk は，中高ドイツ語において diutsch/tiutsch となり，ついには現代ドイツ語の deutsch へといたる。それでは，deutsch という語の歴史は，中世ラテン語の theodiscus とともに始まるのであろうか。それとも，theodiscus に先立つ前史が存在するのであろうか。

さて，この「deutsch の起源」をめぐる問題については，これまでドイツ語学・歴史学の双方からさまざまな議論が繰りひろげられてきた[1]。その論点は多岐にわたるが，この中で theodiscus の語源については，ほとんど唯一ともいうべき合意点が見いだされている。theodiscus の語源は，全てのゲルマン語に広く現れる theudo，すなわち「Volk 民衆」を意味する名詞と，出生・起源・所属を示す接尾辞 -iska に求められる。

1) 以下の叙述についての詳細は，拙稿 (注 2), 1-4 頁を参照されたい。

議論が大きく分かれるのはここから先である。上記の二つの語からは，theudisk という単語が理論的には形成されうる。それゆえ，theudo と同様

に，theudisk もまた全てのゲルマン語において存在したに違いない，との見解も提起されることになる。ところが，theudisk という語は今日残されている文献史料において実際には一度も現れてこない。史料では theodiscus のみが，上述の通り 786 年以降確認されるにすぎない。これらの事情から互いに鋭く対立する二つの見解が提起されることになった。

(i) deutsch の起源をラテン語の theodiscus と見なす立場。

(ii) 比較言語学などの手法によって ＊theudisk の存在を推定し，この語に deutsch の起源を求める立場（＊の印は「再建語」，すなわち文献史料には現れないものの研究者によってその存在が推定されている単語であることを意味する）。

これが，「deutsch の起源」に関する第一の疑問である。

第二の疑問は，theodiscus あるいは——その存在を推定する場合——＊theudisk の語義に関してである。その語義は，上述の語源からして「volklich 民衆の」，「zum Volk gehörig 民衆に属する」となる。ただし，theodiscus の表記対象は，当初の用法では極めて限定されていた。すなわち，この形容詞は主に “lingua theodisca” という組み合わせで，専ら言語のみを表記する単語として機能しており，「民族」などはまだその表記対象に含まれていなかったのである。“lingua theodisca” とは，字義通りに訳するならば「Volkssprache 民衆語」である。この訳語では，“lingua theodisca” を用いたのがあたかも民衆だけであり，聖職者をはじめとする教養層はその中に含まれない，との誤解を招くかもしれない。そこで，本稿ではさしあたり「民衆語」の概念を，教養語としてのラテン語とは明確に対比され，むしろ日常生活において一般に用いられる言語，と理解しておきたい。それでは，「民衆語」という普通名詞的語義は，いかにして「ドイツ語」等々のような固有名詞的語義へと変化していったのであろうか。

さて，これらの問題，特に第一の疑問はいうまでもなく本来ドイツ語学の研究領域に属する。筆者自身の関心は，もちろんそれとは本質的に異なるところにある。筆者は目下，第二の疑問との関連において，「Deutsche ドイツ人」，すなわち中世ラテン語の「Theodisci/Teutonici」という呼称の出現

過程に興味を抱いている。theodiscus の語義は時の経過に伴い，その本来の「民衆の」という普通名詞的語義から，「ドイツの」という固有名詞的語義へと変化した。また，他方において theodiscus の表記対象も，"言語" から "民族" へと拡大していったのである。それゆえ，この語義の変化の過程と，"Nation 民族" としての「ドイツ人」の形成の過程を何らかの関連で結び付けて捉えることができないであろうか，と考えているのである。

このような構想への予備的考察として筆者は先に，言語学者 Leo Weisgerber (1899–1985) の包括的所説の一部と，これに対する批判を紹介・検討した[2]。上記の第一の疑問点，さらに第二の疑問点の一部について，ヴァイスゲルバーの見解を要約するとおおよそ次の通りである。

2) 「"Theodiscus" の起源——L. ヴァイスゲルバーの所説の検討を中心に」『北大史学』31, 1991年。上記の問題意識については，特に 2–3 頁を参照されたい。

(1) ヴァイスゲルバーによれば，音韻・語源あるいは歴史的背景などから考えて，＊theudisk が存在していたことに疑いの余地はない。ただし，この語は全てのゲルマン語において存在したのではなく，ゲルマン語の中の「Westfränkisch 西フランク語」において形成された。＊theudisk は，およそ 700 年頃，北ガリアの二言語併用地域における民族対立を背景として造語された。この語は，当時 "ロマンス語化" したフランク人に対して，ロマンス語化していないフランク人の言語，つまり「Fränkisch フランク語」を主として表記したのである。

(2) theodiscus は 780 年頃，＊theudisk をラテン語化することによって成立した。カール大帝は，ゲルマン諸部族を武力によって帝国へと編入する一方，彼らを共通の「Muttersprache 母語」，すなわち "lingua theodisca" によって文化的側面においても統合しようとした。"lingua theodisca" の表記対象はそれゆえ，「フランク語」はもとより，カール大帝の支配下のその他のゲルマン諸部族の言語に限定されていたのである。

一方，ヴァイスゲルバーに対する批判は主に次の 4 点に集約される。

(1) ＊theudisk には，その存在を裏付けするだけの文献史料が欠如して

いる。

(2) ヴァイスゲルバーは，初期中世における民族の形成にとって言語が担った役割を過大評価している。

(3) ヴァイスゲルバーは，ゲルマン諸語の共通性の側面のみを，「母語」という後代の概念を用いることによって過度に強調している。

(4) theodiscus とカール大帝の「教養改革」の関係は，ヴァイスゲルバーが考えるほど明確ではない。

筆者は以上の整理によって，研究史において一時期を画したヴァイスゲルバー説も現時点においては修正を余儀なくされていることを明らかにしたつもりである。そして，自らのさしあたっての検討課題としては，上記の批判点 (1) との関連で，まず theodiscus の最初期の史料事例を具体的に検証することを挙げた。前稿では，あくまでもヴァイスゲルバー説の紹介・検討に重点を置いたため，肝心の史料事例については遺憾ながら全く言及できなかったのである。なお，theodiscus については既に邦語文献でも言及されているが，筆者の管見する限り，個々の事例に立ち入った考察はまだなされていないように見受けられる[3]。

3) 山田欣吾「"ドイツ国" のはじまり――レーグヌム・テウトニクム概念の出現と普及をめぐって」『一橋論叢』84-3, 1980年, 297頁 注6。江川 温「中世フランス王国の民族意識――10―13世紀」中村賢二郎編『国家――理念と制度』，京都大学人文科学研究所，1989年，7頁。この他，"ゲープハルト" など，ドイツ史に関する概説書でも，必ずといってよいほど *theudisk/theodiscus についての記述が見られる。ここでは最新のものとして次の文献のみを挙げておく。T. Reuter, *Germany in the Early Middle Ages c. 800–1056*, London, New York 1991, S. 52. J. Fried, *Die Formierung Europas 840–1040*, München 1991, S. 120 f.

そこで本稿では，前稿における予備的考察を継続する目的で，*theudisk/theodiscus に関する史料事例を可能な限り詳細に伝え，まず史料からいかなる情報が得られるのかを明らかにしてみたい。その際検討の対象となるのは，上述の問題関心からして基本的には *theudisk/theodoscus の語義である。すなわち，本稿での主要な課題は，この語が表記対象とする言語の範囲を画定するという基礎的作業にある。

I "þiudisko"

deutsch の起源を *theudisk と見なす研究者にとって，その最大の難問は，この語の存在をいかに文献史料の面から裏付けるか，という点にあった[1]。そこで，彼らの一部が着目したのは，4 世紀半ばに Ulfilas によって翻訳された『ゴート語訳聖書』である。ウルフィラは，この中で，「ガラテヤ人への手紙 2, 14」にみえるパウロの言葉を次のように翻訳している。"jabai þu Iudaius wisands *þiudisko* libais jah ni iudaiwisko, haiwa þiudos baideis iudaiwiskon ?"[2] (「あなたは，ユダヤ人であるにもかかわらず，ユダヤ人のようにではなく，異邦人のように生活している。それなのにどうして，異邦人に対してユダヤ人のようになることを強いるのか。」)[3] ここで注目したいのは，ゴート語の副詞「þiudisko 異邦人のように」である。その語幹である þiuda という語形は，古高ドイツ語 diutisk の語幹の diot に対応している。それゆえ，þiudisko と diutisk の間には——その語義についてはともかく——語形の点で明らかにつながりがある，と考えられるのである。なお，ウルフィラがこの語を用いたのは，その翻訳中この一箇所のみである。また，þiudisko は，ギリシア語の原文では ἐθνικῶς に，『ヴルガータ』では gentiliter にそれぞれ対応している。

---

1) 前掲拙稿 12 頁参照。

2) *Die gotische Bibel*, hg. v. W. Streitberg, Teil 1, 3. Aufl. Heidelberg 1950, S. 355. (イタリックは引用者による。以下，同様。) W. Krogmann, *Deutsch. Eine wortgeschichtliche Untersuchung*, (=Deutsche Wortforschung, H. 1), Berlin-Leipzig 1936, S. 7. 同書の 7–40 頁には，必ずしも完全ではないものの，*theudisk/theodiscus に関する史料事例が収録されている。

3) なお，ゴート語原文の解釈については，本学部独語学講座助教授・清水誠先生の貴重な御助言を賜った。記して感謝の意を表したい。

さて，「deutsch の起源」という問題の研究史は，他ならぬ Jacob Grimm (1785–1863) とともに始まる。グリムは，『ドイツ語文法』(第 3 版, 1840 年) の補論においてこの問題と初めて取り組んだ際，早速この þiudisko に注意を向けた[4]。グリムによれば，þiudisko は 4 ないし 5 世紀頃，ゴート語におい

てすでに広く普及していた語であった。しかし，この語はゴート語のみに存在していたのではない。彼は，þiudisko に対応する語が他のゲルマン諸語にも存在していたに違いない，と推定したのである。このようにして再建された語が *theudisk である。すなわち，グリムの所説によれば，*theudisk はいわゆる「Gemeingermansch ゲルマン共通基語」の一つとして，全てのゲルマン語において存在していたことになる。こうしてゴート語の þiudisko は，*theudisk の存在を推定する研究者にとって，文献史料上の有力な根拠の一つとして位置付けられることになったのである[5]。

4) J. Grimm, Excurs über Germanisch und Deutsch, in: *Der Volksname Deutsch*, hg. v. H. Eggers, (=Wege der Forschung, Bd. 156), Darmstadt 1970, S. 1–16, hier S. 4 ff. (以下, *V. N.* と略記), (zuerst in: ders., *Deutsche Grammatik*, Erster Theil, Dritte Ausgabe, Göttingen 1840, S. 10–20).

5) その一例として，以下の文献にみえる *theudisk の系譜図を参照。G. Baesecke, Das Nationalbewußtsein der Deutschen des Karolingerreiches nach den zeitgenössischen Benennungen ihrer Sprache, in: *V. N.*, S. 324–350, hier S. 329 (zuerst in: *Der Vertrag von Verdun 843*, hg. v. Th. Mayer, Leipzig 1943, S. 116–136). St. Sonderegger, Tendenzen zu einem überregional geschriebenen Althochdeutsch, in: *Aspekte der Nationenbildung im Mittelalter*, hg. v. H. Beumann— W. Schröder, (=Nationes 1), Sigmaringen 1978, S. 229–273, hier S. 242.

グリムの見解に対しては，その後歴史学者の Alfred Dove (1844–1916) が真っ向から反論を展開した[6]。ドーヴェは，ウルフィラの用語法全般に詳細な検討を加え，その翻訳の特徴を明らかにした。問題の þiudisko については，この語と同じ文章中に用いられた「iudaiwisko ユダヤ人のように」という語との関連に着目し，この二つの単語の語形の類似性を分析した。そこから彼が導き出した帰結は，þiudisko があくまでもこの翻訳のためにウルフィラによって全く新たに造られた単語であり，それはいわば例外的な一回限りの用法に留まった，というものである。ドーヴェによれば，ウルフィラはギリシア語の副詞「ἐθνικῶς 異邦人のように」をゴート語へと翻訳するに際して，これに対応するゴート語の副詞を見いだしえなかった。この場合ウルフィラには，ἐθνικῶς をゴート語に既存の単語を複数組み合わせることによっ

て翻訳することも可能ではあった。しかし，彼は無理に形式ばった訳語を充てることを好まなかった。そこで彼は，ゴート語の名詞「þiudos 異邦人」に注目し，この名詞を基にその派生語としての副詞形 þiudisko を新たに造語したのである。この造語に際して範例となったのが，þiudisko のすぐ後に用いられている iudaiwisko という副詞の語形であった。

6) A. Dove, Bemerkungen zur Geschichte des deutschen Volksnamens, in: ders., *Ausgewählte Schriftchen vornehmlich historischen Inhalts*, Leipzig 1898, S. 300–324, hier S. 319 mit Anm. ＊＊, (zuerst in: *Sb. d. Bayer. Akad. d. Wiss., phil. -hist. Kl.*, Jg. 1893). Ders., *Studien zur Vorgeschichte des deutschen Volksnamens*, (=*Sb. d. Heidelberg. Akad. d. Wiss., phil. -hist. Kl.*, Jg. 1916–8), Heidelberg 1916, S. 67 ff.

ウルフィラの þiudisko がいわば ad hoc な造語の産物であった，というドーヴェの見解は，その後大多数の研究者によって支持され，今日ではほぼ通説としての位置を占めるにいたっている。他方，þiudisko は当然のことながら deutsch の起源をめぐる研究の考察対象からは除外された[7]。このことのもつ意味は，何であろうか。すなわちそれは，＊theudisk に関連する史料事例が次節で取り上げる 786 年の theodisce 以前の時期において全く見いだされない，ということである。この結果，＊theudisk に関連する史料事例としては，アングロ・サクソン語の þéodisc (900 年頃)と，本稿の冒頭で言及した diutisk (1000 年頃) がその最初期の事例となる[8]。もちろん，＊theudisk の存在を推定する研究者達は，このことでその論拠の全てを失ったのではない。例えばヴァイスゲルバー[9] や，現在の研究者では Ingo Reiffenstein[10] は，ドーヴェの見解を支持しながらも，ゴート語の þiudisko とは別の論拠，すなわち語形論や音韻論などの観点からあくまでも ＊theudisk の存在を強く主張している。筆者が先に述べた第一の疑問点，すなわち ＊theudisk の存在をめぐる議論は今もって解決されていない，というのが研究史の現状である。

7) Vgl. I. Reiffenstein, Bezeichnungen der deutschen Gesamtsprache, in: *Sprachgeschichte. Ein Handbuch zur Geschichte der deutschen Sprache und*

ihrer Erforschung, hg. v. W. Besch u. a., 2. Halbbd., Berlin, New York 1985, S. 1717–1727, hier S. 1717. (ゲルマニストの視点から，1984年までの研究史を整理したもの。) H. Thomas, Der Upsprung des Wortes Theodiscus, in: *HZ* 247, 1988, S. 295–331, hier S. 297 f. 現在の研究者の中でグリムと同様の見解を示しているのは，筆者の知る限り Sonderegger, a. a. O. S. 240 のみである。

8) Krogmann, a.a.O. S. 7 f., S. 37 f.

9) L. Weisgerber, Theudisk. Der deutsche Volksname und die westliche Sprachgrenze, in: ders., *Deutsch als Volksname. Ursprung und Bedeutung*, Stuttgart 1953, S. 40–95, hier S. 44, S. 47 f. auch in: *V. N.*, S. 103–165, hier S. 107, S. 111 f. (zuerst in: Marburger Universitätsreden, Nr. 5, Marburg 1940). Ders., *Der Sinn des Wortes "Deutsch"*, Göttingen 1949, S. 58–61. *theudisk が西フランク語起源であると主張するヴァイスゲルバーにとって，ゴート語の þiudisko は自らの論理構造には適合しなかったのである。

10) Reiffenstein, a. a. O. S. 1718. Ders., Theodiscus/diutisk——die „lingua gentilis"? in: *Gedenkschrift für Ingerid Dal*, hg. v. J. O. Askedal u. a., Tübingen 1988, S. 6–16, hier S. 9, S. 11.

II "tam latine quam theodisce"

(1) オスティア司教ゲオルクの書簡 (786年)

中世ラテン語の形容詞 theodiscus の存在は，786年に初めて確認される。具体的には，オスティア司教 Georg が教皇使節としてイングランドに赴いた際に，ローマ教皇ハドリアヌス1世宛に送付した書簡の中においてである。ただし，その語形は副詞形の theodisce である。

このときゲオルクは，まずノーサンブリア王国の Corbridge での教会会議に出席し，引き続きマーシア王国の Cealchyd の教会会議を訪れた。"Et in conspectu concilii clara voce singula capitula perlecta sunt et *tam latine quam theodisce*; quo omnes intellegere potuissent."[1] すなわち，Corbridge での決定事項は Cealchyd の会議の出席者の面前で，全ての人々に理解できるよう「tam latine quam theodisce ラテン語と theodiscus によって」，個々の章ごと明瞭に読み上げられたのである。

1) *MGH Epistolae* IV., hg. v. E. Dümmler, 1895, ND. München 1978, Nr. 4, S. 28. Krogmann, a. a. O. S. 15–17.

ここではまず，次の二点に注目しておきたい。まず第一に，tam latine quam theodisce という文言について。ここからは，theodisce がラテン語と対比される言語であることが明らかである。第二に，theodisce が用いられた場所がイングランドであったこと。イングランドは，確かに "ゲルマン語圏" の一つではあるが，今日の "ドイツ語圏" には属していない。その意味で，theodiscus の最初の事例がイングランドに現れているという事実は注目にあたいする。

次に，問題の theodisce の語義を明らかにするために，ゲオルクの使節団についてさらに詳細な情報を史料のなかに探し求めてみよう。

(2) 書簡の背景

この使節団派遣の目的と経緯については，ゲオルクの書簡から次の情報を得ることが可能である。ローマ教皇ハドリアヌスはまず，トーディ司教 Theophylakt を通じてゲオルク宛にある書簡を送った。その中で教皇はゲオルクに対し，イングランドに赴き当地の教会の状態をローマ教皇の路線に従って改革する旨の命令を与えた。ゲオルクは当時，フランク国王カールの宮廷に滞在していたと考えられる。このことは，ゲオルクの報告の中で次のような言及があることから推定される。"Ego autem adsumpto mecum adiutore, quem *filius vester excellentissimus, rex Carolus*, ob reverentiam apostolatus vestri nobiscum misit, *virum probatae fidei, Uuigbodum abbatem atque presbiterum* . . ."[2] すなわち，カールは教皇に対する敬意の証しの意味で，Wigbod という名の一修道院長を補佐役としてゲオルクの使節団に同行させたのである。

2) *MGH Epistolae* IV., Nr. 4, S. 20.

さて，ゲオルクの一行はイングランドに上陸すると，カンタベリー大司教，次いでマーシア国王 Offa らによって迎えられた。ここで使節団は二つのグループに別れ，ゲオルクはヴィグボートに伴われてノーサンブリアに，テオフィラクトゥスは南へとそれぞれ向かうことになった。ゲオルクは，ノーサンブリアの Corbridge において教会会議を主宰し，全部で 20 章から成る決

議をまとめた。

こうして任務を終えた使節団が再びマーシアへと戻る際に，二人の人物が現れる。彼らは，ノーサンブリア国王とヨーク大司教から派遣された使者であった。“His namque peractis et data benedictione perreximus adsumptis nobiscum viris inlustribus, legatis regis et archiepiscopi, *Alquinum videlicet et Pyttel lectores.* Qui una nobiscum pergentes et ipsa decreta secum deferentes in concilium Merchiorum, ubi gloriosus rex Offa... convenerat.”[3] つまり，この二人とはかのアルクィンと Pyttel という名の聖職者である。二人は，使節団とともにマーシアへと向かい，国王オファおよび聖俗界の代表者ら多数が待ち受ける Cealchyd の教会会議の場に，Corbridge の決議録をもたらした。この教会会議の出席者について，当該書簡は国王オファの他に高位聖職者 17 名（大司教 1，司教 12，修道院長 4）と俗人 4 名（“dux” 3, “comes” 1）の名前を明記している[4]。そして，彼らの面前で上記の決議録を読み上げる際に，問題の “tam latine quam theodisce” という文言が現れるのである。

3) Ebd., S. 28. 本節の冒頭で引用した “Et in conspectu...” 以下の文章は，この箇所に続くものである。

4) Ebd., S. 28 f.

なお，アルクィンは 786 年にすでにカールとの親交をもっていた。両者の交友関係は，781 年のパルマにおける出会いを機に本格化した。それ以前に両者間の接触があった可能性も指摘されているが，その正確な時期は不明である。アルクィンがイングランドを離れ，実際に大陸での滞在を開始したのは，おそらく 782 年からであると考えられている[5]。いずれにせよ，ゲオルクの書簡からは，アルクィンがフランク王国での滞在を一時中断し，786 年に故郷のノーサンブリアに戻っていたことが明らかになる。

5) Vgl. E. Dümmler, Zur Lebensgeschichte Alchvins. in: *NA* 18, 1893, S. 51–70, bes. S. 56–59. D. Bullough, Albuinus deliciosus Karoli regis. Alcuin of York and the Shaping of the Early Carolingian Court, in: *Institutionen,*

Kultur und Gesellschaft im Mittelalter. Festschrift für Josef Fleckenstein, hg. v. L. Fenske u. a., Sigmaringen 1984, S. 73–92. なお, Pyttel は, ヨークの diaconus であり, 773年にアルクィンの命によってローマに派遣された他, アルクィンの随行者としてフランク王国にも赴いていることが知られている。Bullough, a. a. O. S. 78, 80, 82.

(3) theodisce の語義

以上が786年の事例を考察するに際して, 出発点となる基本的な情報である。ここから, theodisce の語義について, 何を読み取ることができるのであろうか。

ただ, その検討に入る前に "語義" という表現について留意しておきたい。ここでは, 本稿のテーマに付きまといがちな誤解を避けるために, "語義" を次の二つの側面, すなわち theodiscus の "実体" と "機能" に分けて考えたい。

(i) theodiscus という語の "本来の意味"。

(ii) theodiscus が表記対象とした "言語"。

theodiscus の "本来の意味" は, 本稿の冒頭において述べたように「民衆の」,「民衆に属する」である。ただし, この形容詞は, 当初 "lingua theodisca" という組み合わせで専ら「民衆語」を意味していた。他方, theodiscus は,「民衆語」という語義のもとに個々の文脈において何らかの具体的な "言語" を表記していた。そして, その表記対象となる言語の範囲は, 時の経過にともない「ドイツ語」の方向へと徐々に限定されていった。その結果, ついには theodiscus——あるいは後にそれに取って代わる teutonicus[6]——自体が,「ドイツ語の」という意味をもつにいたったのである[7]。

6) 後述 注9参照。

7) Vgl. Reiffenstein, Bezeichnungen (139頁注7), S. 1717–1722.

既述のように筆者の検討課題は, このような "普通名詞的語義" から "固有名詞的語義" への変遷の過程において, theodiscus が表記対象とした "言語" の範囲を個々の事例ごとに画定していくことにある。では, 786年の theodisce は, 具体的にいかなる言語を表記していたのか。

史料に見える “tam latine quam theodisce” という文言からは，theodisce が何よりもまずラテン語と対比される言語であることがわかる。このようにラテン語とともにもう一つの言語が，Cealchyd において用いられた理由は容易に想像できる。この教会会議には高位聖職者のみならず，国王，貴族などの俗人も出席していた。このうち，聖職者についてはともかく，俗人の多くはラテン語で書かれた教会会議の決議文を理解できなかった，と考えられる。それゆえ，ラテン語を解しない人々は，個々の決議の内容を検証するに際して，彼らが日常生活において用いる言語，すなわち「民衆語」の助けを必要としたのである。そしてこの場合，「民衆語」の具体的内容は，Corbridge という場所，あるいはその出席者の顔触れなどから判断して，「Angelsächsisch アングロ・サクソン語」であった，と考えられる。このように 786 年の theodisce がアングロ・サクソン語を表記していた点については，研究者の見解が一致をみている[8]。

8) Vgl. Reiffenstein, Bezeichnungen, S. 1718.

ところで，それでは何故 theodisce は「アングロ・サクソン語」を表記しえたのであろうか。

筆者がこのような疑問を提起するのは，786 年以後の theodiscus の事例との関連を考慮してのことである。筆者がこれまで知りえた限り theodiscus の事例は，例えば 786 年以降の 90 年余りの間に，約 30 の史料において合計すると約 52 例確認される[9]。これらは，地理的に分類するとフランク王国からイタリアまで広く分布しているが，イングランドでは 786 年の事例以外に確認されない。そして，大陸に分布する残りの事例の中でも，アングロ・サクソン語を表記している用法は一例も確認されないのである[10]。このような 786 年の事例の孤立した位置は何を意味するであろうか。アングロ・サクソン語の表記は，単なる例外と見なされるべきなのであろうか。

9) ここでさしあたり，約 90 年間と区切ったのは，876 年に teutonicus が史料に初出するまでの時期という意味からである。teutonicus は，これ以降徐々に theodiscus に取って代わることになる。概数で表示したのは，一部の史料についてその

成立年代が確定されていないためである。また，この数字には確認証書などで引用された事例は含まれていない。これら主として9世紀の事例については，次稿において論じる予定である。

10) なお，theodiscus は，11世紀の半ばにいたって史料からその姿を最終的に消すことになる。実はこの間，9世紀の末にイングランドにおいて一度だけ Theotisci という事例が確認されるが，この事例については先に言及した þéodisc (139頁参照) とともに別の機会に取り上げたい。

この疑問は，もう一つ別の疑問とともに「786年の事例の謎」[11] として，現在にいたるまで多くの研究者を悩まし続けている。もう一つの疑問とは，"tam latine quam theodisce" という文言が書簡の送付者であるゲオルク自身の手に由来するのか，という疑問である。

---

11) L. Weisgerber, Die geschichtliche Stellung des Wortes Deutsch, in: ders., *Deutsch als Volksname* (139頁注9), S. 96–154, hier S. 135 (zuerst in: *RhVjbll* 12, 1940, S. 1–47).

先にその名を挙げたドーヴェは，当該書簡の伝承を検討した結果，今日に伝わる唯一の写本がゲオルクの随行者のヴィグボートによる書写・改訂を経たものであることをほぼ明らかにした。そしてこのことを基にドーヴェは，theodisce の使用者についてゲオルク以外にもヴィグボートとアルクィンの可能性が考えられる，という興味深い指摘をおこなった[12]。この見解は，786年の事例の解釈のみならず，上記の "孤立した位置" という問題と結び付いて，theodiscus の起源をめぐる一連の論争において常に中心的な役割を担っていくことになった。

---

12) A. Dove, Das älteste Zeugniß für den Namen Deutsch, in: ders., *Ausgewählte Schriftchen*, S. 324–333, (zuerst in: *Sb. d. Bayer. Akad. d. Wiss., phil.-hist. Kl.*, Jg. 1895).

結びに代えて—残された課題—

以上，本稿においては，＊theudisk/theodiscus に関する最初期の事例の紹介に焦点を絞った。まず，ウルフィラが用いたゴート語の þiudisko は，

ad hoc な造語の産物であったことがドーヴェの研究によって明らかにされた。その結果，deutsch に関する史料事例としては，786 年の theodisce が最も古い事例として位置付けられることになる。その表記対象がアングロ・サクソン語であったことについては，これまで研究者間に合意が見いだされている。

ただし，後者の事例については一つの問題が今後の検証課題として残された。すなわち，「何故，theodisce はアングロ・サクソン語を表記しえたのか」という疑問である。筆者は，この疑問についてさしあたって次のような仮説を抱いている。theodiscus が表記対象とした言語は，当初の段階においてはまだ，後に“ドイツ語”を構成することになる諸言語（フランク語，バイエルン語，アレマーネン語，ザクセン語等々）に限定されていなかった。むしろ theodiscus は，ラテン語あるいはそれから派生したロマンス語との対比において，ゲルマン諸語を表記対象としていたのではないか。アングロ・サクソン語は，“ドイツ語”とともにゲルマン語に属しており，theodisce の表記対象になりえたと考えられるのである。

この点については，今後 786 年以降の史料事例を検証していく過程で，再考しなければならない。

また，本論の末尾において theodisce の由来に関する議論が存在することに言及した。ドーヴェによれば，ローマ教皇宛の書簡において theodisce を使用した人物として，ヴィグボート，アルクィン，ゲオルクの三人のいずれかの可能性が考えられるという。しかし，この問題は筆者の関心にとってさしあたりあまり重要な意味をもたない。なぜならば，この三人のいずれに theodisce の由来を帰するにせよ，少なくともその表記対象がアングロ・サクソン語であった，という事実そのものに変わりはないからである[1]。

本稿においてこの問題に立ち入らなかったことについてもう一つの理由を述べておこう。ドーヴェの指摘は，単に theodisce の使用者の解明にとどまらず，この事例が theodiscus に関して最古の事例であるという事情から，必然的に theodiscus の起源論へと踏み込むことになった。ここにその一例を挙げるならば，ドーヴェの「ボニファティウス起源説」[2]，ブラウネの「ア

ングロ・サクソン起源説」[3]，ヴァイスゲルバーの「西フランク起源説」[4]，そして近年においてはトーマスの「フランク＝イタリア起源説」[5] 等々である。これらは，一見したところ，起源論をめぐる活発な研究状況を想像させるかもしれない。しかし，筆者はその成果について目下のところ否定的な印象をもっている。極論を許されるならば，これらの所説の多くは，786 年以降の史料事例の一部のみを援用して単に解釈の可能性を争ったにすぎない。程度の差こそあれ，いずれも仮説としての域を出るものではない，と考えられるのである。

1) Vgl. C. Brühl, *Deutschland——Frankreich. Die Geburt zweier Völker*, Köln-Wien 1990, S. 187.

2) 上述 7 頁注 6, 13 頁注 12 の文献。

3) W. Braune, Althochdeutsch und Altsächsisch, in: *V. N.*, S. 17–27 [Auszug], (zuerst in: *PBB* 43, 1918, S. 435–445).

4) 前掲拙稿において挙げた文献の他，当該事例については特に L. Weisgerber, Amiens und die theodisca lingua. in: ders., *Deutsch als Volksname*, S. 287–291, auch in: *V. N.*, S. 368–373, (zuerst in: *RhVjbll* 14, 1949, S. 233–235) を参照。

5) Thomas, a.a.O. (139 頁注 7)

ここでは，786 年の事例についてまだ論じ残された問題があることを指摘するに留めておく。筆者は次稿以降においても，まず史料事例から得られる確実な情報を蓄積していくことにその力点を置きたい。そして，その後で改めて上記の起源論をめぐる論争に立ち戻ってみようと思う。